

あごら

MINI 〈2月号〉

1978年2月10日発行 ¥100 〒50

今月のなかみ

〈巻頭言〉おくらしている各都道府県の行動計画……………	1
〈お知らせ〉「全米婦人行動計画」日本語訳ができました……………	1
〈お知らせ〉「自分を变える本」を特價販売……………	1
〈報告〉私が見た全米婦人会議 河野貴代美……………	2
〈あごらのあごら〉東京周辺に五つの新拠点……………	7
〈あごらのあごら〉阪神地区で仲間と出会いたい……………	7
〈お知らせ〉女のつとめ・女の講座……………	8

〈女と男〉のミニ雑誌〈あごらミニ〉 ●何でも言える
●何でも書ける ●小さなくひろば=AGORA・あごら
●あなたの声を待っています。みんなでつくる〈あごら〉

一九七五年、メキシコ会議で採決された「世界行動計画」に基づき、各国政府は「国内行動計画」を策定することが義務づけられた。それに対し日本は、昨年、不十分な内容ながらも「国内行動計画」を認承、各自自治体でその実施のための具体的な計画が練られることになった。しかし、実際には、各地域での計画は遅々として進んでいない。「国際婦人年」をきっかけとして行動を起こす「女たちの会」では、昨年十一月、各自自治体に対し、行動計画の策定状況をたずねる公開質問状を送付、このほど、その回答がまとめられたが、結果は、全く悲観的なものであった。

すなわち、「でき上がっている」は零、「つくりつつある」が四都道県で、北海道・岩手が53年3月、東京が53年6月、高知が54年3月を、それぞれ完成目標にしているのみ。

これに対し、「これからつくる」は、宮城・福島・埼玉・山梨・長野・富山・和歌山・山口・佐賀・熊本・沖縄の十一県、「つくる予定はない」は、青森・山形・新潟・栃木・群馬・神奈川・静岡・愛知・三重・島根・岡山・広島の十二県、「検討中」または「担当部門が未決定」が、秋田・千

葉・岐阜・石川・滋賀・京都・大阪・兵庫・奈良・愛媛・長崎・宮崎・大分の十三府県、「未定」が香川で、残り八県からは回答もなかった。

一月二十日、〈あごら〉の主催で行なわれた全米婦人会議の報告講演会で、私たちは強い感動を受けた。本号の河野貴代美さんの報告も、アメリカの女たちのすばらしい活動を生き生きと伝えているが、行動計画が上から与えられたものではなく、下から盛り上がったものであったからこそ、全米会議は大成功となったのであろう。

考え方によっては、日本で「未決定」の府県が、かくも多いことは、自主的な運動の盛り上がり之余地を残しているともいえる。各地の草の根から燃え上がる計画が、各自自治体をゆるがすことを期待したい。

一九七五年のメキシコ会議への日本政府案は、民間婦人団体には極秘裡に決定されたが、一九八〇年に予定されている「国際婦人十年」の中間会議（テヘラン会議）には、二度とこのようなことを許してはなるまい。一九八〇年へ向けての準備会が、二月二十二日（水）七時に〈あごら読書室〉で持たれる。一人でも多くの参加を願っている。

全米婦人行動計画

日本語訳（全訳）

できました

一部三百円、送料六十円
でお頒ちします

ひとつひとつの項目が実に具体的。政府に迫るには、なるほど、こんな迫り方をしなくてはと、教えられることの多い感動的な内容です。国情はちがいますが日本の女の人たちに（もちろん男にも）、ぜひ読んでもらいたい！ 計画が出てきた背景の「解説」もついており、四百字で百三十枚ほどの長文です。

（申し込みは下記へ）

東京都新宿区新宿一―九一六

あごら「行動計画係」行
（代金および送料は切手で
結構です）

自分を変える本

会員特價千円、送料百六十円
お申し込みは事務局へ

私が見た全米婦人会議

河野 貴代美



米政府主催の初の「全米婦人会議」が一九七七年十一月十八日から二十一日までの四日間、テキサス州ヒューストンで開かれた。

この会議は、メキシコ国際会議のあと、大統領命令で作られた「国際婦人年を支持する国内委員会」が主体となり、公法九四一・一六七により政府拠出金五百万ドル(約一二億円)の援助で開催されたものである。

会議では各州、各自治領から選挙された二千名の正式代議員(この中には「国際婦人年を支持する国内委員会」推選の代議員も含まれている)が、前述の国内委員会が作った二十六項目にわたる「国内行動計画案」を討論・採択した。これらの決定は会議のあと百日以内に大統領に伝えられ、大統領は、百二十日以内にこれらを検討して国会に提出しなければならないことになっている。

この会議の感動的な情況は、新聞・雑誌に伝えられたが、「あごら編集部」の河野さんも直接、現地で取材、記事を寄せられた。

ロスアンジェルスに着いた日、友人と「ジュリア」という映画を見た。数年前に亡くなった著名な劇作家であるリリアン・ヘルマンと彼女の女友だち——ジュリア——との稀有な愛情の実話の映画化である。

ジュリアとリリアンは少女時代からの親友である。リリアンは書くことに、ジュリアは医者にと、それぞれの道を進む。ジュリアは、第二次世界大戦のヨーロッパに学び、嘱望された将来をかえりみず反ナチ運動に身を投じた結果殺害され、一方リリアンは自分の書く才能への懷疑に苦しみながら一流のライターになつていく。ジュリアとリリアン。この二人の女性が自分たちの生はこのためにあるのだ、という明確な目的を持ち、勇気を持ち、努力を惜しまず、他人への関与を忘れず彼女らの生を全うする、その姿がなんともすばらしい。二人は深く愛しあい支えあう。シャンと背をのばして手を組みながらヨーロッパの街の石畳を闊歩する二人の歩きかたが実に美しい。ポジティブな女性、ポジティブで創造的な女性の生活を真正面からみすえたこんな映画ができたのだ。こんな映画が商業ベイスで作られ、男性にも共感を呼び、優秀映画ベストテンの上位に入りうるほどアメリカ社会は変わってきているのか、というある意味では勝手な思いこみと興奮で寝られない一夜をすごした。

非常に個人的な体験に属するこんなことを冒頭に書いたのは、ヒューストンに行つて、いまアメリカ女性の生活が根底から大きく変わつていく、そのターニン

グポイントにあることを深く認識し、その意味で、渡米第一夜に「ジュリア」を見たことは、とても象徴的であつたといえる。

私は映画の感動をそのまま「全米婦人会議(National Women's Conference)」の開かれたヒューストン市に持ちこんだ。そして興奮と気持ちよい混乱の四日間をヒューストンで過ごし、一か月たつたいま、気持ちも静まり、こんどはあふれるような情報と報道の数々を前に、何をどのように「あごら」の読者に伝えればよいのか、あふれ出る熱い思いの処理にとまどつてゐる。

四千キロを走り伝えられた かがり火

宇宙中継基地の町ヒューストンの空港は、一目で会議参加者とわかる女たちであふれていた。なぜ一目でわかるのかといえは、老いも若きも、大きなトランクを自分で持ち、市内行きのバスに乗りこんでいる。大がかりな撮影器具を持った人たちが、乗ったり降りたりしながら荷物運びこんでいる。たまにタクシーを使う人がいるとバス乗り場に来て親しげに「ホテルはどこだ? 相乗りしないか」と誘いかけてくる。生き生きとしていて親切で、これから起ころうとしていることに対する期待であふれているからである。

市内のホテルはどこも満員で、いくつかの主だったホテルに行くと、チェック

インの長い行列の合間を動きながら「MS」誌のグロリア・スタインナムがインタビュイーを受けている。待ちくたびれた人たちは勝手にフロアーにすわりこんだり長々とねそべっている。掲示板には重なり合ったメモ・告知の類。ホテルに散在する一般参加者のために会場と各ホテルを結ぶ四コースにわかれたバスが三十分おきに用意されていた。

そして――。
全米婦人会議の幕あけは、「かがり火」の到着から始まった。十一月十八日正午。

一八四八年七月、ニューヨーク州の小さな町セネカフォールズで開かれた第一回の「婦人権利集会」を記念して、同地からヒューストンの会議にむけて四千キロ近くを女性たちの手でリレーされてきた「平等」のシンボルの「火」。副会場となっているアルバート・トーマス・セリター前の広場は、報道陣と、全米ありとあらゆるところから集まった女性たちや彼女らの持つプラカード、たれ幕などでごったがえしていた。

大歓声の中、トーチが到着。「国際婦人年を支持する国内委員会」の議長、つまりこの会議の会長でもあるベラ・アブザグ、テニスのビリー・ジョン・キング、カーター大統領の義理の娘ジュディ・カーター、マーティン・ルーサー・キング未亡人等、多数の著名人が最後の数百メートルを一緒に走った。一般参加者も市内に入ってからコースを教えられていて、私の旧知のルシール（七十歳、彼女はどの婦人会議にも参加してい

る）など、トーチと一緒に十キロも走った、と顔を輝やかせていた。トーチは仮設のステージに立った地元の高校生の手が高くかがめられた。私の横に女の子を二人連れた男性がいて彼は「今日は妻が仕事だから子どもを連れて来た。この会議は非常に意義あることで、特に二人とも女の子だから女性たちが集まってここで何をしようとしているのか、子どもたちの将来のためにもみせておきたい」と話していた。スピーチのたびにわき上がる歓声のあいだに、私の頭の中を「一九七七年アメリカ婦人宣言」の格調高い響きが交錯する。

「私たち女性は今ここに歴史を前進させるために集まった。全米いたるところから参集した私たち女性の年齢や考えや生活様式はそれぞれ異なる。私たちは、多様な経済的・社会的・政治的・人種的・文化的・教育的・宗教的なバックグラウンドを持っている。結婚している人も、独身者も、未亡人も離婚者もいる。私たちは母親であり、娘である。そして私たちは姉妹だ」と始まり、女性の生活が子どもを育てるだけで終わった時代は去った。過去二百年の歴史をみれば女性を得たものもあるがまだ性差別は続いている、国際婦人十年の終わる一九八五年までにアメリカ女性に、完全な平等が、法律により、社会道徳により、保障されるまで、「私たちの力を結集して、より完全なる連帯のために」努力をおしまないことを誓う」

セネカフォールズからヒューストンまで、百二十九年の歴史が流れた。しかし

四千キロのトーチをリレーしてきた女たちは、世代から世代に引き継がれてきた婦人運動の歴史を、わずかに九月二十八日から十一月十八日の一か月余でヒューストンに結集させたのであった。

火花の散るようなエネルギー

翌十一月十九日、アルバート・トーマス会場に隣接するサム・ヒューストン・コロンナムで正式な開会式が開かれた。会場を幾重にもとりまく一般参加者の長い行列。反女性運動家たちが、「リブやレズはもっと聖書を読め」などと書いた大きなプラカードを持ってアチコチに立っているが、ただ黙って立っているだけで、まさに向こう岸に起こっていることを静観している、といった格好。

主会場は体育館で、ステージには「Woman」と大きく一言。会議の進行を逐次テレビで流すためにヤグラが真中に二台。

ステージには、「国際婦人年を支持する国内委員会」のメンバー、女性国會議員、ヒューストン市長などが居並び、ジョンソン、フォード、カーターの歴代大統領夫人の登場で始まった。

ベティ・フォードは、ブルーマー（黒い運動用の女性のための半ズボン）を初めてデザインしたブルーマーさんにふれ、自分の結婚前の姓もブルーマーだと皆を笑わせた。ロザリン・カーターは、大統領もこの会議に来られないのを残念に思っている、しかしこの会議のことに深い関心を示している、と述べ、カーター

「政権になってからどれぐらい女性が政府の重要ポストに登用されているか宣伝も忘れなかった。

次々に著名な女性が登場し、全米女性がこの時をどれほど待ち望んでいたか、この会議がどれだけ有意義なものか、われわれ女性はいくら米国の社会に参与し、歴史を作っていくのだという共通の目標をかかげ、参加者全体を興奮のうずまきこんでいった。（余談だけれども前ニクソン大統領夫人・バット・ニクソンは病気で参加できず、ジャックリー・オナシス・ケネディは、招待をこたわったという。）
会場は女たちの声であふれ、唯一の男性の声、ヒューストン市長の歓迎の挨拶はほとんど無視されたほどであった。（ヒューストン市長の声が四日間を通して聞かれた唯一の男性の声であったが。）

開会式は一種のセレモニーである。だから演出もある。非常にラジカルな私の友人は、「壇上にエライさんが並んでいるということはトップがいて下がいるという構造になっている」と批判したが、カーターは「ここに来たのは私自身のためでもありません」と言い、フォードも「夫、ジェリーに「私はヒューストンに行くことに決めているからね」といってたら、彼は『当然でしょ。そう思っていたよ』と言った」と述べたように、彼女たちが一人の女性として、多かれ少なかれ婦人運動を自分の問題として受けとめていることを感じたのは、私一人ではないと思う。

午後、「国内行動計画案」の討論採決に入る前に、議長の提案で、会場にいる全員が手をつなぎ、つないだ手を高くあげて「連帯の誓い」を大合唱した。「私たちはアメリカの歴史を前進させるためにやっとなにに集まった。忍耐強く人の意見を聞き、賢明にものごとを判断し、洞察と勇気を持って自由と平等を求める。アメリカよ、これから私たちは決して無視されることがないのだ」と。

そのあと拍手と口笛がしばらく鳴りやまなかった。あるグループはブラジャーを振ってキャーキャーワーワーという歓声。

ジーンズあり、ハダシあり、しゃれているのもあり、なりふりかまわないものもある。ベタベタとスローガンをかいたポスターをつけ、デキシーハットをかぶっているものもある。とにかく陽気で、ポジティブで、ふれると火花の散るようなエネルギーに満ちているのであった。

斬新で具体的な行動計画案

「国内行動計画案」は全部で二十六項目ある。詳細は資料をこらん頂きたい。これを作るまでにいくつかの過程があった。ほん訳の中にも明らかにされているが、一つ一つのバラグラフが、「国際婦人年を支持する国内委員会」（以下「国内委員会」と略称）の推せん、決まった数以上の州大会の推せん、それから最後（十月）にさらに「国内委員会」がつけ加えた推せんにわかれていく。つまり、各地区の女性の意見が「国内委員

会」でまとめられ、またそれが州大会にもどされ、さらに最終的に「国内委員会」でまとめられたというわけである。私はこれを訳しながら、「国内委員会」の委員（全員女性）が最後の日、夜もふけ、たばこやコーヒー皿の散らかった部屋で、「ヤレヤレ、これでやっとなんて終わった。だいたい網羅したと思うけれど、もうおちこぼれはないかしら。もうありませんね」などと念をおしあっている様子を想像した。それほど女性の生活のあらゆる部分を網羅した「国内行動計画案」である。政府主催の会が、政府に何かをさせようという目的で開かれたとすれば、この反対がまあ常識であろう。

女性の置かれている状況を明確に言い切り、大統領や国会や地方自治体政府はこう「すべき」であると迫っている。特にあらゆる項目にわたって、少数民族の抑圧されている女性のための特別な考慮が繰り返され要求されている。この計画案がいかにか斬新で、ある意味ではラジカルであるか、ということば、例えば、「犯罪者」ののところを見て頂ければわかる。ここでは犯された犯罪には全くふれないで、犯罪者の社会復帰を説き、刑務所などというところにとじこめないで地域社会や中間施設内でそれを試みるよう述べ、犯罪者と社会・家族の関係の配慮にまで及んでいる。例えば精神障害者になるべく精神病院に閉じ込めないで地域社会で治療しようというのは精神科関係者に限らず比較的一般にも受け入れられている概念である。しかし犯罪者を刑務所に入れないで地域社会で社会復帰を

させていくということは、犯罪とは何か、という基本的態度にふれることになる。少なくとも罪を犯したものは罰せられるという単純な発想に基づいていないことだけは言えるのではないだろうか。日本の国内行動計画にある「母性の尊重」などというアイマイな表現の代わりに、保育・雇用・ERA（男女平等憲法修正案）などの基本的な婦人問題に、実に具体的な迫り方をしていううえ、老人問題にもふれ、少数民族の女性にも及び、ビジネス、心身障害女性、農村女性、レイプ、暴力亭主問題をも含めている。心のこもった感動的な計画案だ。ペラ・アブザグは、記者会見で、「いったい女性はいかに何を欲するのだ」とよく聞かれるのだ」と語っていた。

抱き合い、涙を流して喜ぶ

このすばらしい計画案が、主会場のサム・ヒューストン・コロシアムで一つ一つ討議され、挙手による採決で採択されていく。代議員は写真の写った身分証明書を持て、代議員のいるフロアーには彼らと許可をもらったメディア関係者しか入れない。採決などに支障をきたすからである。公式のオプザバー・一般参加者は一段と高くなったところから会議の進行を見つめ、様子はテレビで隣のアルバート・トーマス会場に報告され、入れない人、入りたくない人たちが、カーベットの敷きつめられた広いフロアでなりゆきをみている、というぐあいである。主会場では常に七千人から一万人の人たちが傍聴していた。二十六項目の中で最も注目を集めたのが、ERA（男女平等憲法修正案）、生む自由・生まない自由（妊娠中絶）と性の選択（レズビアン権利）の三つである。

ERAとは、憲法に「法の下で性の違いを理由に何びとも差別されない」という条項を入れる、ということである。人種・年齢・教育などによって差別されてはならない、という条項はあるが、性が明記されていない。

ERAは、歴代六大統領によって支持され、国会も通過しているが、非常に州権の強い米国では、四分の三以上の州、三十八州が批准しないと完全な効力を発揮しない。現在まで三十五州が批准しており、あと三州が一九七九年までに批准しないと憲法修正案にならない。批准していない州は、フロリダ、アラバマ、ジョージア、ミシシッピ、ルイジアナなどの南部の保守的な州である。かつて女性の選挙権が、憲法修正に加えられたときにも、これらの州は最後まで抵抗するか、批准しないままになっている。州議員たちは保守的で奴隷制度から完全にぬけきっていない、市民権、平等権などの権利を承認することは、まるで自分の権利が侵害されるように思っている。ERA推進者は、彼らのことを「グッド・オール・ボーイズ（good ole boys）」と皮肉をこめてよぶ。

考えてみれば、実に単純なことなのである。性によって差別されてはならない、ということがどうしてそんなに反対

されなければならぬのか、と不思議になる。反対派は、戦争が始まったら女性もかりだされる、とか、伝統ある女子校に男性の入学をこばめない、離婚したら女性のほうが慰謝料を払わなければならぬ、トイレが男女共同になる云々というが、人はみな平等であるべきだという基本理念に迫る論拠を欠いている。

ERAは長いあいだ米国女性運動の大きな柱となってきた。会議の立役者の一人で元ジョンソン大統領夫人の報道官をしていたリズ・カーペンターは、「私が死んだら花など送ってくれな。三つの州を送ってくれ」と言い、ロザリン・カーターは去年の暮れのインタビューで、去年一年間の自分の失敗は何かと聞かれ、もっと早くERAに取り組んでいるべきだったと語っている。

それで会議では、反対派（全米女性のための会議だから反女性運動派の代議員も選挙されている）は、動議につぐ動議をだして、会議の引き伸ばしをはかる、反対派は全員総退出する、イヤもっと暴力行為をするだろう、などといった情報があり、事前にとびかかっていた。

オクラホマの代議員からは、ERAの実効を七年に限った、という唐突な意見がでたり、動議の修正のそのまた修正という複雑な過程があったが、真夜中をすこしすぎて、圧倒的多数でERAが採択されたときは広い会場をゆるがす大歓声がしばらく鳴りやまなかった。女たちはあちこちで抱きあい、涙を流してよろこびをわかちあった。もちろんこれでERAが効力を持つわけではないのだが。

みんなは疲れた足をひきずってそれらのホテルに帰る。それからまた各州の代議員たちは、なるべく議事の進行をスムーズにするために、あなたはどっ思っているのか、どんな修正があるのか、などと話しあうのである。これは舞台裏。

誰でも入れる副会場

副会場となったアルバート・トーマス会場のことに少しふれておこう。

広い会場に入ると、一階は、百ぐらいの小さなコーナーを持つ出店で占められている。婦人関係の本やマークの入ったアクセサリーを売っているところもあれば、各州の紹介・宣伝の出店；と多種多様である。ある州のコーナーに腰をおろして女性の状況を熱心に話しあっている人もいる。家族づれの人たち、男性の姿もみられる。入場無料。

二階は「セネカフォールズの南」と名のついた舞台があって、婦人運動を支持する有名・無名の俳優たちがショーをやっている。休けい中は、誰かが舞台上に上がって何やら演説をぶっている。その前の広々としたフロアにはカーペットが敷きつめられ、人はクッションによりかかりながら、人のひざまわりで長々と寝そべりながら、テレビ放映されている会議の様子をみている。

小会議室はパネルディスカッションや講演に使われ、「外交について全米女性の声をきけ」というパネルでは、女性国会議員や国連のシビラさんがパネリスト。「世界的に変わっていく女性の役割」

では人類学者のマーガレット・ミードさんが、「女性は核兵器の使用についていままでも無関心でありすぎた」と警告を発している。

政府の要職にある女性の講演もある。法務次官、厚生次官、大統領補佐官など、普段は新聞やテレビでしかみたことのない女性たちが、ほんの二、三十名を前に、きどらずにのんびりと話をしている。文部・厚生次官（厚生省は、文部省も含んでいる）の話をちょっと聞いたが、一番話題になっていたのは性差別のない教育カリキュラムであった。誰かが「自分の地区の教育委員長は男性で、九条（性差別のない教育をうたっている）に関心を示さないが、いかにしたものであろうか」と発言し、マリー・ベリーさんは、「その男性に手紙を書いてそのコピーを送ってくれるか、名前を教えてくれれば私が手紙書いてもよい」と応答していた。こんな講演シリーズが二日で三十八もある。

廊下をへだてて、分科会が開かれていく。「どのようにすれば政党に影響を与えられるか」「駆け込み寺の設置」「女性企業家の問題」などなど。

隣の主会場で白熱した討論が続けば、こちらは誰でも入場でき、いろいろな婦人問題を多様な角度から学ぶ学習機会の場というおもむきであった。

感動的な採択の瞬間

会議の二日目は日曜日。教会に行ったりする人たちのために午前中はお休み。

しかし、ホテルでは、それぞれの主張を持った人たちが記者会見をしたり小集会を開いている。「レスビアン」のグループ、「バイセクシャル（両性愛）」、「売春婦問題」のグループなど。

午後から引き続いて討論に入る。アルファベット順になっている項目を一人三分に限って賛成・反対の意見を述べる。そして起立による採決。州ごとにかたまっているのだが、自分の意見が違ったから、かりにたった一人であつても平気でつたっている。「あああの人反対なの？」などと同僚に言われることなど誰も考えてもみないのだから。その間に議事進行について質問・異議が入ったり、あまりに会場が騒がしいので議長が何度も静粛を要求することに多くの時間がとられる。開会が三十分、ひどいときには一時間ぐらい遅れるので、十分に内容のある討論が時間をかけてなされるという感じではない。だいたいどの代議員も自分の考えは、ほぼ決まっているし、いわゆる著名人の演説を除いてはあまりまじめに聞いている。あちこちにかたまつてコピーをすすり、私語しあっている。報道陣も障害になっている。静かにしてくれ、数がかぞえられないから報道関係者は隅にどいてくれ、という議長の声はもうかすれている。私はみんなの行儀の悪いのにはあきれた。隣にすわっていたシアトル紙の記者に「もし私が米国女性の性格を一言で言え、と言われたら、口唇的（食べ、のみ、しゃべり、喫う傾向）だというよ」と書いたメモを渡したら彼女はウィンクしてみせた。

その間にもとにかく議事は進行する。

健康・ホームメーカー（ハウスワイフ）妻とはいわない。国際関係、と大きな修正もなく進み「生む自由・生まない自由」の項が注目をあびた。

長い間、米国女性キリスト教論理の下で妊娠中絶を法律で禁止されてきた。日本のようなザル法ではないので、どうしても妊娠中絶が必要になったら医者は免許取り消しを恐れてやってくれないから、いかにわし素人に頼むしかない。

路地裏の片角に見張りをたてて、という感じで、「路地裏妊娠中絶」という。このような素人手術で失われた女性の生命は少なくない。普通妊娠ではなくて強姦や近親相姦などの強制された妊娠はどうなるのだ。そうでなくても一〇〇%完全・安全な避妊法のない現在、女性はいつも生む性としてのマイナス面を背負っている。この問題は、近代女性解放運動の大きな柱となってきた。一九七二年、南部の州である女性が妊娠中絶をし、これは最高裁にまで持ち込まれ、彼女は無罪になったか、あるいは中絶を許可されたか、どちらか明確な記憶がないが、それ以来、妊娠中絶を許可する州がふえていく。

胎児をいつから人間とみなすか、宗教家、人類学者、医者によって意見のわかれるところであろう。反対者は、保守的なクリスチャンに多く、彼らは妊娠時から人間とみなし、中絶を殺人とみる。賛成者は中絶をすすめているわけではない。それをすすめるもしないも個人の基本的な選択にまかせよ、といっているわけである。

ある。

シュラフリーという人に導かれた「ストップERA」という反対勢力があったように、ジェファーソン博士（女性）をリーダーとした「生を受ける権利」という中絶反対グループがある。

「生む自由・生まない自由」は妊娠中絶だけでなく母性保護、十代女性の母性管理にもふれていて、たいした混乱もなく採択された。

これが終わるころから、「We are everywhere」と書かれた小さな風船がたぐさん会場の中に持ちこまれた。一般参加者の席にはほとんどはジーンズにTシャツを着て、風船を持った女性がじりじりふえていった。「性の選択」（レズビアン）の権利を支持するグループである。

「性の選択」は、「国内行動計画」の中でも最も論争のまとなっているものの一つである。要するにレズビアン（女性）の権利の「解説」という要求である。行動計画の「解説」にもあるように、同性愛者は自分の性向をあきらかにすれば、それを理由に職場を解雇され、アパートの入居を拒否され、異端者あつかいを受けてきた。しかし異性愛者であらうと同性愛者であらうと、性の好みは個人の自由としてよいではないか、というのである。一体同性愛者が社会にどのような害を与えてきたというのだ、というのは彼女らの悲痛な叫びだ。

非常に興味深かったのは、賛成者は胸をはり自分はレズビアンだ、と堂々と主張したのに対して、反対者は、小さな声で、まだ自分の持ち時間はあるか、と気

にしたり、焦点を欠いた話しぶりであったことだ。さらにもしろなかったのは、このときだけ、会場が静かになったこと。スピーカーに対する場内の反応が少しでも上がる前に議長は静かに、と制止し、一番討論の内容が聞きとれた。

ふんいきの盛り上がったところで米国女性解放運動の母、ベティ・フリーダーの登場。（彼女の評判ははなはだよろしくない。ERAのときも、彼女は自分の順番を待ちきれず、前にいる人に「自分に順番をゆずれ」と言い、頼まれた人が「私の番だけれど、ベティのような人に言われてはことわれない」とゆずったし、話したときにもバラバラとした拍手。私はフリーダーの態度に憤慨をおぼえた。）

今回は彼女は順番を守って口を切った。「今まで私は、レズビアンに反対だと思われてきた。そしてそれを認める。しかしこの問題はどういまままでの婦人運動を分裂させてきたものはない。いま私は、この問題を道徳の問題ではなくて、市民権の問題だと認識する」と。割れるような拍手。採決。大多数賛成。風船が舞い上がり、女たちは抱き合い、手に手をとりあってフロアを練り歩く。「私は彼女を心から愛する」と書いたプラカードをお互いに持った恋人同志が抱きあっている。キスしあっている。自らレズビアンと名乗る代議員は全体の五%にも満たないはずである。しかし、これは「国内行動計画」の中に入れた。米国社会が多様な価値観に実に寛大な国（反面その弱点はもちろんだ）である。

ることをみせつけられた一瞬であった。

二十六項目のうち最後の婦人省の設置を除いて、二十五項目多少の修正を含んで採決された。婦人省の設置討論を聞く機会がなかったが、会議のあとマサチューセッツ州の代議員は、婦人省の設置で国がすべてを統括してしまつては困る、と述べていた。たしかに州ごとに女性の状況の違いがあり、州権の強い米国社会ではそういう意見も強いのであろう。婦人省の大任になりたいたい人がいてその人のために入れられた項目（州大会には通されていない）だ、といううわさもあった。

たくましい歩兵がすすめた

州会議は全米十四万の女性が参加した。南ダコタ州では八十四歳の州議會議員が女性の政治参加をよびかけ、バーモント州では、会議などに出たことのない人が、夫の反対をおしきって家出したら、同じような人にくさん会った、南カロライナ州では農婦たちが州会議の開催日を祭りと決め、たばこ栽培をボイコットした、アイオワ州では精神薄弱者や仮釈放中の人も（彼女らも同じ人間だ。）参加した、など、エピソードを数えあげたらきりがない。自分はウーマンリブだなどと思ってもいない人、婦人問題に関心もなかった人、会議などに出たことのない人などの参加が会議の最大の特徴といえよう。こういう普通の人たちのエネルギーが会を支えた。

代議員に加えて一般参加者はアルバー・ト・トーマス会場も入れると延べ十万

人、メディア関係者（ほとんどが女性）が七百人、毎日のように新聞紙面を飾り、会議の中継も入れて長時間番組を組んだ局もあった。

リーダーたちはなるべく表舞台に顔をださず新人に話す機会を与えようとしていたのも印象深かった。いわゆる保守的といわれている人が、いわゆるラジカルといわれている人と話しあってみたら、お互いにそんなに違いのない楽しい人たちであることがわかった、と私に話してくれたのはネバダ州の代議員。知らない同士でルームメートになり、食事を一緒にし、「帰ったら、また共にがんばろう」と別れていった。片手にサンドイッチ、片手にビールを持ち、話しこみ、笑いあい、はげましあい、のめりこんでいった女たち……。それは開会式に講演した著名な国会議員、バーバラ・ジョーダンの「いま私たちに必要なのは神風パイロットではない。歩兵だ」ということばどおり、たくましい歩兵の姿であった。

しかし、ヒューストン会議では「法律」が作られたのではない。これから「国内行動計画」をどのように具現化していくか、女性たちに課された荷は大きく重い。

私は女性たちを信じたい。進歩と前進を信じたい。そして再びバーバラ・ジョーダンのことばをかりる。「私たちはどのような種をまき、何をかりとるのか？」

私は、あえて反婦人運動グループにふれなかった。なぜなら私は婦人運動の価値とその意味を信じるからである。

東京周辺に五つの新拠点

●雲の下からスライスイ芽を伸ばしている「あこら北海道」、経済的自立を目指す「あこら東海」など、「あこら」各拠点の活動を聞くにつけ、「あこら東京」の活動をもっと活発に……の声が強くなりました。ひと口に東京と言っても広い東京。この機会に、五つに分割、近郊首都圏も含め、地域とも結びつけた活動することになりました。

●さっそくスタートしたのが「あこら武蔵野」。一月九日に初会合、まず何をやりたいのか、それから話し合うことにしました。ユカイでフアイトのある仲間がそろっています。あなたにお会いできるのを楽しみに……。毎月第二月曜日の夜は、東村山福祉センターへ。

（呼びかけ人）山本かなえ
（四二二—四三三—六七四九）
（連絡先）丹羽 雅代
（四二二—九三三—六九四一）

●埼玉から東京北部を中心に「あこら北東京」、中央線沿線の「あこら中央」、京王線沿線の「あこら京王」、新宿周辺の「あこら新宿」も、二月初旬から打ち合わせを始めます。連絡先は八ページをこらなくさい。

阪神地区で仲間と出合いたい

いつもまじめな問題に取り組んで、わたしの胸の中のものや実に見事に活字にしてお下さる「あこら」さんにはいつも敬服しております。系統だった勉強と日頃の患業のなせるわざであろうと思ひ、このような雑誌を倒産させては絶対に女の面目にかかわると思っております。さて私は三号を紹介されて以来、そのとおりとなり、毎回来し心打ち込んで読んでおります。そしてますます自分と同じ思いの人が大勢いるもんだと力強く思っています。ですが、東海や北海道など各地に「同

志」が結束されるのを見るに、私も一人で読んでいるよりは同じ思いの人と話し合うことができたらと切実に思うようになりました。情報センターなどを通じ、女性問題研究グループを探してみましたが、各種グループはあれど、帯に短かしたすきに長しでビツタリのものでありません。そこで、もし、会員、読友の方がいらつしやいましたらご紹介ください（安平加代子）

＊

さっそく心のこもったお返事が頂けたこと、心からお礼を申し上げます。が、実のところ、もうグループを作ると決めてしまわれたようだと聞いて感じました。また実に多様な方がいらつしやうなど、年齢も案外高そうだし（？）など、どうも私の意欲はしほむ一方の要素が多すぎました。でも、あんなにすばらしい「あこら」が現に存在しているのです。私のしほんでいく意欲もあるところまでくるとビタリとその動きを止めてしまふのです。

ここで私の自己紹介をさせて下さい。私は結婚歴十四年、中一の息子と小四の娘がいます。学校を出るまでは成績が何とかを言いましたが、社会へ出たとなに、物事は「男」と「女」ではかれることを知りました。そして抵抗しても相手の組織が大きすぎてどうにもならないということも……。中略結婚これほど私に屈辱や不満を見せつけてくれたものはありませんでして。それを抑えて「いい奥さん」になろうとしたことにもありますが「あこら」を見てから「私は間違っていない」と意を強くしました。同じことを考えている人がいるということは何となく心強いことでしょう。もう一つ感謝しなければならぬのは、私は「あこら」によって男（夫）を敵に回していたのは何も解決しないことを学んだことです。どちらも人間、共に成長するのでなく

ては……。大げさに言えば家庭の崩壊を免れたわけです（中略）。

ある日、新聞で「主婦は人とかかわり合いを求めている」という樋口恵子さんの記事を読み、「この人わかつては」と、目からうろこが落ちる思いをしました。それからはどうすればすばらしい人との出会いが得られるかを何よりも問題としました。私の本棚は無意識のうちに女性作家のものばかりになったのです。読みながら「この人もわかつてはる、感じてはる」と感動しました（中略）。あちこちに「あこら」の支部ができるのを見て、苦勞があるのだからと、きつとあの人たちは目をきらきらさせて本物の人とかかわり合いをもつておられるのだらうと羨ましく思いました。

先日、「自分の生き方を考える」というセミナーに出ました。講師は杉野元子さん、この人も「わかつてはる」人でした。私は杉野さんに「あこら」を渡しました。最終回に、杉野さんは皆の前でこう言われました。「私がこのセミナーをもつて本当によかったことの一つは雑誌「あこら」を知ったことです」と。私がどんなにうれしく誇らしい気持ちだったかご想像頂けますか。杉野さんは「神戸にもいろいろグループがありますが、こういう進歩的なグループはないようです。ないといすれば作ってみようほかないです」と私の方に視線を向けられました（中略）。「一人が「グループを作った」と私にけしかけました。気がついてみると、私は皆を前にして何か言っておりませんでした。はずみでグループが誕生してしまったのです。これからどうなるか全くわからないのですが、この記事を読んで何か感じ方はご連絡ください。

〒653 神戸市長田区大日丘町

三六十一 安平加代子

<女のつどい・女の講座>

日	時	テ	マ	会	場
2月10日(金)	18:30~20:30	あごら18号編集会議「全米婦人会議と女性解放運動」		あごら読書室	03-354-9014
	18:30~21:00	例会「家族について」〈あごら九州〉		福岡市婦人会館	092-712-2662
12日(日)	13:00~	例会「私にとって学ぶということ」 報告者 石川美智子〈あごら京都〉		石川美智子宅	075-672-2805
13日(月)	18:30~	シスターフッド大会〈ウーマンズハウス〉		ウーマンズハウス	052-763-3571
	19:00~	手話で話そうよ〈ホーキ星〉		ホーキ星	03-341-9364
	19:00~	イングリッシュ・フォー・フェミニスト(毎週木曜)〈ホーキ星〉		ホーキ星	
	18:30~	労働分科会「雇用平等法ガイドラインの検討」〈行動を起こす女たちの会〉		中島法律事務所	03-354-7010
	19:00~	例会〈あごら武蔵野〉		東村山福祉センター	
14日(火)	19:00~	「1. 28政治が変われば女が変わる——語ろう女たち——」の反省会〈政治を変えたい女たちの会〉		あごら読書室	03-354-9014
	18:30~21:00	野口整体 池田潤子〈からだのひろば〉		千駄ヶ谷区民会館	03-402-7854
16日(木)	19:00~	ひにんと女〈ホーキ星〉 参加費500円		ホーキ星	
17日(金)	18:30~20:30	あごら19号編集会議「女にとって子どもとは」		あごら読書室	
	19:00~	「木整遊具づくりの神賀さんを囲んで」 子供の心・木の心・作り手の心		ホビット村	03-332-1187
18日(土)	13:30~16:30	会員懇談会 総理府編「婦人の現状と施策」—国内行動計画第1回報告書—について 報告者 田中寿美子〈婦人問題懇話会〉		東京都教育会館	
	19:00~	「この男中心の社会で女の生き方を考える——仕事、経済的自立、結婚、家庭をめぐる——」 レポーター 青木やよい氏〈ホビット村学校〉		ホビット村	
20日(月)	12:00~14:00	新宿周辺の方集まりましょう〈あごら新宿〉		あごら読書室	
21日(火)	18:00~21:00	結婚の意味を問う継続討論〈藤村 哲〉		豊島振興会館第5会議室	
	18:30~	教育分科会「教科書チェックの検討」〈行動を起こす女たちの会〉		中島法律事務所	
	18:30~21:00	野口整体—偷気と活元—黒田章子〈からだのひろば〉		千駄ヶ谷区民会館	
22日(水)	19:00~21:00	女のグループが連帯して考えよう 「1980年テヘラン会議に向けての会」		あごら読書室	
24日(金)	10:30~	例会「あごら17号合評会」〈あごら東海〉		名古屋勤労婦人センター	052-251-3811
	18:30~	定例会「今後の運営方針」〈行動を起こす女たちの会〉		渋谷勤労福祉会館	
25日(土)	19:00~21:00	女のうた—青木ともこ 予約・1000円〈ホーキ星〉		ホーキ星	
	18:30~20:00	例会〈あごら北海道〉		北海道クリスチャンセンター	
27日(月)	19:00~	手話で話そうよ〈ホーキ星〉		ホーキ星	011-731-3381
3月3日(金)	19:00~	女の体を自立を考える——上野めだかクリニックの上野さんを囲んで——		ホビット村	
4日(土)	13:30~16:00	「憲法30年と男女平等」 市川房枝・大脇雅子ほか〈日本弁護士連合会〉		日本弁護士連合会館	03-580-9841
8日(水)	18:00~	「1978年国際婦人年中央大会」〈中央大会実行委員会〉		日比谷野外音楽堂(予定)	
10日(金)	18:30~20:30	あごら19号編集会議「女にとって子どもとは」		あごら読書室	
11日(土)	13:00~16:30	わたしたちに未来はあるか「反公害・女集会」——洗剤から原子力まで—— 佐多稲子、山口泰子、飯田しづえ、小泉英政、高木仁三郎、坂下栄		千駄ヶ谷区民会館	
13日(月)	19:00~	例会〈あごら武蔵野〉		東村山福祉センター	

各地のあごら連絡先

あごら北海道

・岩見沢市九条西三丁目 山口里子
 ☎ 0112622446772
 〒0068

あごら北東京

・志木市幸町1-30-20 宮原マンシオン 鈴木優子
 ☎ 04847743781
 〒353

あごら武蔵野

・小平市小川町1-173 丹羽雅代
 ☎ 0423436749
 〒187

あごら新宿

・新宿区新宿1-9-6 あごら内 斉藤千代
 ☎ 0333543941
 〒160

あごら中央

・杉並区荻窪3-7-9 305 長谷川知子
 ☎ 03339177427
 〒167

あごら京王

・調布市仙川町3-12-32 福井浅子
 ☎ 0333087871
 〒182

あごら東海

・名古屋市長久保町小坂B 高橋ますみ
 ☎ 0526210839
 〒459

あごら京都

・左京区北白川久保田町36-4 塚崎美和子
 ☎ 07577914623
 〒606

あごら大阪地区で集まりませんか(呼びかけ中)

・神戸市長田区大日丘町3-6 11 安平加代子

あごら九州

・福岡市西区笹丘町2-4-6 小島豊子
 ☎ 09252177624
 〒810